

39年目の御巣鷹山事故

2024-7-28

Q: どういうことですか？

A: 1985年8月12日に、JAL123便（ボーイング 747-100）が群馬県の御巣鷹山に墜落しました。この8月12日で、39年目になります。事故では520名の方々が亡くなりましたが、いまだに成仏されていないのではないかと残念に思っています。



図.1 JAL123 便の事故現場

Q: 「いまだに成仏されていない」と思う理由は何ですか？

A: 理由は2つあります。① 事故の真因がまだ公にされていないことと、② 事故原因について社会に流言飛語が飛び交っていることです。

Q: ①については、公式の事故調査報告書で明らかにされているのではないですか？

A: 事故調査報告書では、事故原因は図.2のような、ボーイングのAOG（Aircraft On Ground）チームによる後部圧力隔壁（Aft-pressure Bulkhead）の修理ミスとされています。本来は左図のように修理すべきところ、右図のように修理してしまったというものです。

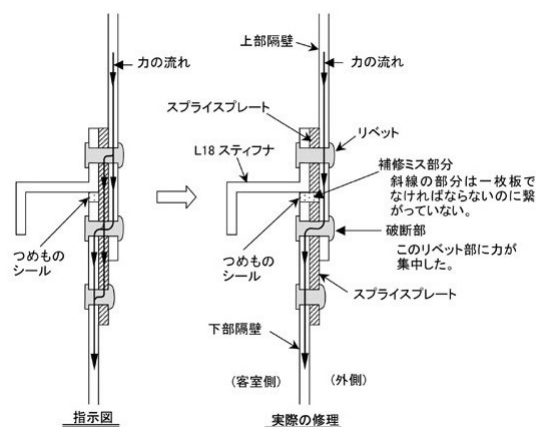


図.2 ボーイング AOGチームによる修理ミス

Q: 修理ミスは、ボーイングが事故の数週間後に自ら公表したのではないですか？

HuFac Solutions, Inc.

- A: その通りです。わが国の社会は、ボーイングによる公表をそのまま信じて、何ら疑いをもちませんでした。ですが、わが国の刑事訴訟法では「被疑者の自白だけで有罪を判決してはならない」と明確に規定されています。
- Q: ボーイングの自白の裏づけをとるための処置はとられたのですか？
- A: 当時の事故調査委員会は、メンバーをボーイングの本社に派遣して、修理ミスの実行者の供述をとろうとしました。ボーイングは、実行者への事情聴取を拒否するだけでなく、実行者の存在すら明らかにしませんでした。
- Q: 刑事訴訟法の規定に照らせば、ボーイングの自白をそのまま信じて事故原因を結論づけるのは、問題があるのではないですか？
- A: 冷静に考えれば、そういうことになります。ですが、事故調査委員会のメンバーはそのことすら考えませんでした。わが国には、異論を唱える法律の専門家もいませんでした。
- Q: ボーイングはなぜ、事実とは違う自白をしたのでしょうか？
- A: 弊社代表は、事故機が伊丹空港で尻もち事故を起こした1978年以来、この事故に深く関わってきました。尻もち事故では、原因調査のために現地に行きました。御巣鷹山事故では、JAL 経営トップの特命で当日に徹夜で原因究明に取り組みました。事故原因については当時から疑問をもっていて、組織とは別に個人的にボーイングに疑問を呈していました。ボーイングは、疑問に真剣に採りあってはくれませんでした。ボーイングが事実と違う自白をしたのは、ボーイングの設計思想の瑕疵を議論の対象にしたくなかったからだと推測しています。ボーイングは、重量軽減の目的で、すべての機種でドーム型の後部圧力隔壁を採用しています。
- Q: ボーイングは、後部圧力隔壁の破損の本当の原因を知っているのでしょうか？
- A: 知っていると思います。その根拠として、ボーイングは現在、破損した後部圧力隔壁の修理にまったく異なる手法を採用しています。
- Q: わが国にも多くの航空の学識経験者や専門家、航空会社の整備技術者がいながら、後部圧力隔壁の破損の本当の原因に気づけないのでしょうか？
- A: 不思議かも知れませんが、気づいていないようです。航空機の構造の基礎を知っていれば、容易に気づくはずですが。事故調査に当たった学識経験者や専門家も、根本的に間違った報告書を作成しています。図.2の右図の修理ミスがあり得ないことも、JALの整備技術者は気づくべきでした。JALは現在、後進の社員への教訓のために、事故機の後部圧力隔壁の残骸を社内に展示しています。破損の本当の原因を知らなければ、本当の教訓を残せないはずですが。
- Q: 破損の本当の原因が知られていないためか、世間では②のようにさまざまな流言飛語が飛び交っていますが、どう思いますか？
- A: 亡くなられた犠牲者の方々は無念に思っておられると思います。流言飛語の多くは、米軍機か自衛隊機がミサイルで123便を撃墜したというものです。これは、まったくの思い違いです。犠牲者の方々は、そんな流言飛語よりも本当の原因の公表を望んでおられると思います。

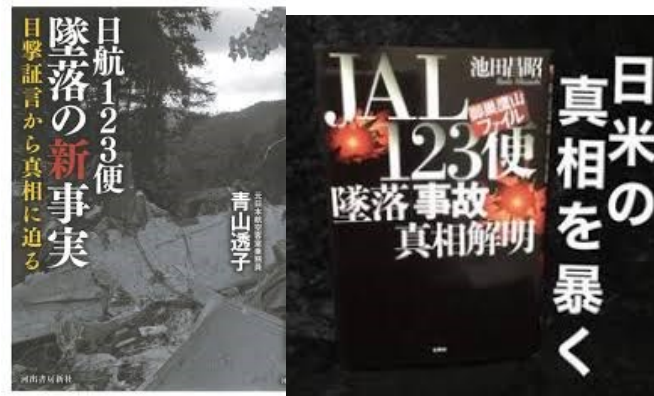


図. 3 流言飛語の例

- Q: 「事故の直前に周囲で戦闘機やオレンジ色のミサイルが飛んでいた」という写真や煙が残されていますが、それでも「思い違い」なのですか？
- A: 視野が狭く考えが浅いボトムアップ思考なら、流言飛語のようにしか考えられないでしょう。ですが、広い視野と深い洞察力によるトップダウン思考で考えれば、まったく異なる光景を思い浮かべることができます。当然、当時の中曽根首相は「まったく異なる光景」を知っていたはずですが、残念ながら、首相も本当の理由を公言できずに「墓場まで持っていく」と話したまま世界を去りました。トップダウン思考で考えれば、戦闘機やミサイルは別の目的で飛び交っていたことがわかります。「別の目的」とは、決してやましいものではありません。国際的にも暗黙で認められている正当な行為です。ですが、公表すれば社会に無用の混乱をまねく可能性もあります。首相は、そのことを懸念して公言しなかったものと思います。
- Q: 流言飛語を飛ばしている人達には、何を望みますか？
- A: それらの人達の目的はさまざまだと思います。今さら、「思い違い」を認めて改めるつもりはないでしょう。ですが、流言飛語の流布が社会を事故の真因の探求から遠ざけています。流言飛語を飛ばしている人達には、そのことも考えていただきたいと思っています。
- Q: 事故の真因を公表するつもりはないのですか？
- A: これまで事故に深く関わってきた弊社代表の立場では、公表を憚られます。第三者の方々に気づいていただき、公表に導いていただきたいと願っています。間違った事故調査報告書のままで、わが国の歴史に禍根を残すことにもなります。

本情報に関する連絡先：

(株) ヒューファクソリューションズ

URL: <http://www.hufac.co.jp>

E-mail: info@hufac.co.jp